

書苑周遊

appearance

渡辺利夫 葉上太郎 宇野常寛 高橋伸彰 ロバート キャンベル 長蘭安浩



新刊この一冊

評者●渡辺利夫

わたなべとしお／拓殖大学総長

『モームの謎』

行方昭夫著

著者の主宰する「日本モーム協会」で話をする機会があった。日本の精神医学の創始者である森田正馬の療法思想について語り、私の死生への構えには森田の思想があることを話した。モームに触れないわけにもいかない。高

校生の時に、姉から貰った大部の『人間の絆』の原書 (Of Human Bondage) を悪戦苦闘の末に読破し、これを二度三度と読み返すうちに、モームの小説世界に引き込まれた遠い昔の思い出話であった。

う書き下ろしの意欲作である。モームには、いわゆる小説家の域には収まらない幅の広さと奥行き深さをもった人生経験がある。医者であったり、スパイであったり、劇作家であったり、世界を旅する漂泊の人であったり、どうやら同性愛的な傾向もあつたらしいのだが、複雑な人生の過程で出会ったさまざまな人間存在を、いかにもと思わされる鮮やかさで紡ぎ出す。その小説群の中にモームという人間の真実が必ずや潜んでいるはずだ、そいつを探り当ててやろうというのが本書の意図である。謎解きの結末をここで紹介するのは野暮だから、やめておこう。

『読書とは死せる者との対話である』といったのは、たしか山本夏彦さんで

ある。この箴言通りの、モームと著者との架空対話が本書の付録として収録されている。実はこれが本書上梓の真意ではなかったかと思うほどの面白さである。モームといえは「皮肉屋」というのが通り相場であるが、この点についての対話の一部が、以下のようになっていて、ほうと思わされる。

モーム 皮肉屋と言われてきたのは、その通りだけど、自分としては、真実をユーモア感覚で表現しただけだと思っている。

行方 物事からちょっと距離をおいて見るということですね。世間には、嬉しい、ありがたい、と素直にそう表現する人もいます。でも、いくら嬉しくても、あまり喜ぶというのも恥ずかしい、照れくさいから、みっともないから、いくぶん斜に構え、冗

談めかして言う人もいます。自分の繊細な気持ち曝したくないという、いわば自己防衛なのかもしれない。これがイギリス流のユーモア感覚で

その時、著者の父上がある時期に「書屋」と呼ばれる強迫神経症に悩まされ行き場を失い、森田正馬の診療所にたどり着き、治療に専念して快癒を得たという話をうかがった。その経緯を綴った父上の著作を、後日送っても下さった。父上は、ビジネスマンであったが、その文章は暢達というのか、のびやかで深々としたものであった。これが遺伝か、と思わされるほどに著者の文章は父上に似ている。

本書は、起伏に富んだサマセット・モームの人生の謎を、全集にして三十数巻に及ぶモームの著作の中に登場する多彩な人物像から採り当てようとい

あり、別の言い方をすればいわゆる「控えめな表現 (understatement)」ですよね。私はそう思いますから、あなたは皮肉屋ではありません。

この対話のすぐ後に、著者が若い時に強い感銘を受けた『サミング・アップ』の一節を語っていて、モームの前でそれを紹介するというくだりがある。著者が語っていたのは次の一節である。「首尾一貫している人など私は一度も見ることがない。同じ人間の中に、とうてい相容れないような諸性質がどうして共存しうるのか、何度も思索してみた。自己犠牲を厭わぬ悪漢とか、温和な気立てのコソ泥とか、貰った金に相当するサービスを客に与えるのを名誉をかけた信条にしている娼婦とか、そういう例を私は知っている」(著者語)。

矛盾の魂としての人間、一貫性のま

BOOK REVIEW



岩波現代文庫 1029円